はしがき

学校長　卯　野　隆　二

昨年８月の第四次答申を以て完結した臨教審の壮大なる教育改革への提言は、今徐に具体化されつつあり、大学入試制度の改正や学習指導要領の改訂も近く実施されようとしている。

このような教育の重大な転換期を迎えて、私達教師は、諸般の改革が教育の理想実現を阻害する社会病理の克服と連動することを願いながら、所与の条件の中で専門職としての資質の向上に努め、国民の負託に応えるべき責任を負っている。

本校においては、創設以来高校教育に関する理論的・実証的研究に取り組み、それらの成果の一端を本校の研究紀要や高校教育研究協議会等の場において公表し、日々の教育実践に還元している。これらの歴史と伝統を継承しながらも、昨年度からは、来る11月18日開催の第13回高校教育研究協議会に向け、社会的な要請や生徒の現実をみつめ、教育上の最も根源的な課題である〝よりよい授業の創造〟即ち生徒の中により高い教育的価値の実現を目指して、「授業の設計と展開」をテーマに研究・実践を続けている。

本号には７教科７論文が掲載されているが、これらは必ずしも前記テーマに拘わるものではなく、又研究期間も短かいため具体的な「授業の設計と展開」の提示にまで至っていないものも多い。研究協議会における研究授業や分科会での発表と合せて、大方のご批判とご指導を得てより一層の発展を期するものである。以下に各論文の概要を掲載順に述べる。

高橋教官は、古文の授業で和歌が難解とされる原因を生徒への調査から分析し、中古中世の和歌を対象に、何れの型の和歌においても、作者の心情をできる限り感得した上で和歌の修辞つまり構成・構図を追求する鑑賞方法が重要であると結論づけている。

木村教官は、歴史教材のうち清末の中国史を例として、生徒の現在だけでなく将来の要請にも応えられるように理解を深めるためには、「教材の構造化」という型（スタイル）の整合性を超えた教材構成が必要であることを提案している。

数学科の共同研究は、本県の数学教育研究グループが昨年から取り組んでいる授業研究の一部の実践報告である。今回は、複数の教師で作成した同一の指導案と授業用プリントに基づいて複数の授業を実践し、授業方法や生徒の反応等について比較検討している。

理科からも共同研究の形で提出されている。全国から本校類似の高校を選び、理科教育の現状と今後のあり方を調査した結果の報告で、特に物理分野の内容及び指導方法等を中心に検討している。

滝野教官は、過去の授業への反省と今後の授業のあり方を体力向上の面から検討するために本校男子に関する多年蓄積の資料を駆使し、入学時の体格・体力の特徴の年次推移を追求するとともに、入学後学年進行に伴う発育発達の様相を分析している。

山下教官は、演奏界のめざましい進歩に伴い、鑑賞授業では「何を、誰の演奏で聞くか」の選択が重要になっているとの現状認識に立ち、カラヤンのヴィヴァルディ「四季」の冬の第３楽章のスコアを題材に、演奏における表現の３要素の分析を通して鑑賞する方法を示している。

最後に、岩城谷教官の論文は、日本人の英語を聞いたり話したりする能力の不足が、単に練習不足だけでなく根本的な言語上の問題に関係するものであり、現在この問題の解決に苦心していることを、英米人の理解にも資するように英文で記述したものである。

研究協議会と合せて忌憚のないご意見・ご指導を賜れば幸いである。